
うまくいかない

すとむみずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うまくいかない

【Nコード】

N8657R

【作者名】

すとむみずみ

【あらすじ】

ある日僕の前に現れた――。

「おまえ、ボクに惚れろっ!!」

それが、その少女――少なくとも僕にはそう見える――から最初に聞いた言葉。

全身を飾る黒。肩まで伸びる白い髪。真っ赤な瞳に、今すぐにも噛みついて来そうな、鋭い歯。ローブが表情に敷く影は、彼女の台詞とは対照的に暗く、冷たく伸びていた。

「え……と」

僕はとりあえず口を開く。

「どうしたの、君？」

「どうしたもこうしたもないっ!!　いいからボクに惚れろよ、人

間のクセにっ!!」

え……と、どうしたもんかな。

「とりあえず、移動……しようか」

さすがに横断歩道の途中では、ね。

ビルが建ち並ぶ路をとぼとぼ歩く。

後ろの方からは、「人間のクセに、このボクの手を握って……」とブツブツ聞こえて来てるけど、多分気のせいだろう。

「ところで――」

僕は振り返り、彼女の方を向く。

「何か食べたいモノ、ある？」

僕が言った途端、少女は目の色を変えた。

「チョコッ!!」

「え? チョコ? チョコが食べたいの?」

「うん。ボクはチョコが食べたい」

「わかったよ。じゃあ、とりあえずデパートへ行こう」

「おお、買ってくれるのかっ!! 人間のクセに、気が利くじゃないか」

僕の財布の中身も気にしないで、彼女はどんどんチョコを選んでいく。

「ちょ……僕あんまりお金持っていないんだけど……」

「人間のクセに、ボクに口ごたえするなっ!!」

それに、お金なんてボクの世界ではいらなかったぞ!?!」
ますます、彼女がわからなくなってきた。

「君は、何者なの?」

屋上のベンチで、単刀直入に訊いてみた。

まだまだ幼いのに、『人間のクセに』だとか、『ボクの世界』とか言って、そのくせチョコにはがつく彼女は、いたい何者なんだろう。

「んー?」

彼女は不機嫌そうに食べるのを止め、それでもちゃんと答えてくれた。

「ボクはアルテュール・デス、12000歳。死神だ。」

『デス』というのは死神のシンボル。ボクはまだ見習いだけど、それでもれっきとした死神だぞっ!?!」

??? 死神？

「好きなモノはチョコレート、嫌いなモノは、虫だ。人間のクセにこんな事答えさせて、これで満足か？」

ちよっとよくわかんないかな。

「それで、マオ、おまえ、ボクに惚れろ」

「……！！ どうして僕の名前を知ってるの？」

「当たり前だろ。ボクは死神だぞ」

「ちよ、ちよっと待って！！」

わけがわからない。

「百歩譲って、死神……？ ってのはいいとして
よくないけど。」

「『ボクに惚れろ』ってどういう事？」

正直、それが一番の疑問だ。

「まったく、そんな事もわからないのか！？」

人間のクセに、彼女は最後にそう付け加えた。

——死神は、人間の命を削るのが仕事。で、個体ごとに寿命の奪い方が違う。アルテュールの場合は、『恋の病』を患わせ、苦しませる事によって寿命を奪うらしい。

アルテュールの話を聞いて、そこまでは整理できた。

「で、君は何で僕のところに来たの？」

「ちよっとっ！！ せっかくボクが直々に名前を教えてあげたのに、まだおまえはボクの事を『君』と呼ぶのかっ！？ 人間のクセにっ」

「じゃ、じゃあ、アルテュール」

「ストップ！！ ボクの事は『アル』と呼ぶように！！ 『アルテュール』なんて寒気がするわっ」

12000歳とはいえ、容姿や怒った表情は、小中学生とあまり変わらないな。

「わかったよ、アル。で、話を戻すけど、どうしてボクのところに来たの？」

「……！！ そんな事、人間には、おまえには教えられないっ！！
死神のルールがあるの」

「ふーん」

アルが目を逸らして、ちよつとだけ笑ってしまった。

「アル」

「何？」

「僕の事も、『おまえ』じゃなくて『マオ』と呼んでほしいな」

「……わかったよ、マオ」

アルが僕をマオと呼んだ時、ひとつの事が脳裏をよぎった。

——これじゃ、カップルみたいじゃないか。

何て事だ。これじゃ、ロリコンだと思われてしまう。いや、でも

僕はまだ15歳だし、このくらいの子だったら……。

「——おい、マオ！！ 聞いている？」

ごめんなさい、聞いてません。

「さっきから何回も言っ——」

あ、これはマズイな。

「新しいチョコをボクに——」

アルって、こんなにかわいかったっけ。

「マオ、はやくよこ——」

っていうか、これは、

「おい、マオッ」

惚れちゃいました。

「マオ、はやく次のチョコをよこせっ!!」
もう、直視できない。

「アル、よく聞いて」

チョコを手渡しながら言う。

「……………僕、アルに惚れたよ」

「何!?! 本当か!?!?」

そーか、ついにマオもボクに惚れたか。これから悶え苦しみ、ボクに命を捧げろ」

「……………アルは?」

「ん?」

「……………いや、アルは僕の事、好きなのかなーって」

「それなら心配ない。死神は、好きな人間のところにしか行かない」

「え? って事は…………?」

「…………!! ええーい、言わせるんじゃない!! マオのバカっ!!」

あー。アルさん、顔が赤くなってますよー?

これはもしかして。

ツンデレとかいうやつか。

「もう夕方か」

「本当か? マオ、帰る?」

「ボクは家に帰る」

「家? 家があるの?」

ないものとはばかり思っていた。

「あ、当たり前だろう。人間のクセに、そんな事もわからないのか」
「ふふふ」

「な、何が可笑しい!!」

「何でもないよ。じゃあね」

「ああ、明日8時にここへ来い」

「わかった。アル、気をつけてね」

「…………。マ、マオこそな」

マオが空高く昇ったのを見届けて、僕も家に向かった。

あー、くそっ。今別れたばかりなのに、もう明日を楽しみにしてる。

翌朝。

「ねえ、アル。アルの事をもっと教えて」

「ボクの事？ 昨日教えただろ？」

「だから、もっとだよ」

「な、何が知りたいんだ」

「アルはどうやって命を削るの？ 『恋の病』で苦しんだら、寿命が減る訳？」

『死神のルール』とか言っただけで教えてくれないかと思ったけど、アルはすんなり教えてくれた。

「死神は、人間の『負の感情』をエサにする。もちろん、そんな死神の心は廃れているんだ。

だけど、何故かボクの心には『愛情』がある」

アルは一呼吸して、更に続けた。

「『愛情』は死神にとっては毒だ。だからボクは、人間を愛する事によって、毒を外に出してるんだ。

そして、ボクはマオを怒らせて、マオから出る『負の感情』を食べなきゃいけない。

なのに、マオからは『愛情』しか出ないんだ。マオからボクへの愛情しか」

「ちょっと待って。じゃあ何で最初、『ボクに惚れろ』なんて言っ

たんだ。そんな事言わずに、怒らせとけばよかったじゃないか」

「だって……」

「だって？」

「一方通行なんて、哀しいじゃないか」

——！！ まさか、死神からそんな言葉を聞けるなんて。

「じゃあ、アルは何も食べれてないんじゃない？」

「いや、チョコを食べると大丈夫だ」

「なんで？」

「知らない」

わからないのかよ。

「知らないけど、とりあえずボクはお腹が空いた。マオ、チョコを買いに行くぞ」

お金、ないんだけどなー。

事件は急に起きた。

僕がアルと出会って4日目の朝。

その日もデートついでにチョコをデパートまで買いに行く途中。

——いきなり、アルが倒れた。

「アル、アルッ！？ どうしたの？」

「ははは……、やっぱ……り……チョコだけじゃ、栄……養が……足りな……」

やっぱりか。いや、こんな事思っている場合じゃない。

「アル、待っててっ。すぐにチョコ買ってくるから」

「だから、チョコじゃダメ……」

あ、そうか。どうすればいいんだ。

「じゃ、誰か呼んで来るよ」

「いや……マオ、傍にいて……」

アルとは信じられないくらい弱りきっている。

「わかった、アル、しっかりしろっ」

アル、アル、死ぬな、アル――。

アルは突然、ケロッと起き上がった。

「アル？ アル、大丈夫なの？」

「………おお、何ともない」

「――よかった」

「うん。でも違和感が……」

まさかっ、アルはそう叫んで、そのままのボリュウムで、やっぱ

り——と続けた。

「マオ、大変だっ!! 羽が、羽がない!!」

「……え? どういう事!!?」

「に、人間になっちゃった」

「人間に?」

「多分、アルが『愛情』しかくれなかったから、死神としてのボクが死んだんだ。死神ももとは人間だから、人間になったんだよ」

「……そうなの? よかった」

僕はアルをきつく抱きしめる。

「アル、愛してるよ」

「バ、バカッ!! 『愛してる』なんて言うな、人間のクセにっ」

「アルだって人間じゃないか」

「……っ」

長い沈黙の後、アルが初めて僕に、愛してると言った。

(後書き)

やっちゃんいました☆

なんか、うまくいかない〜。

あ、感想お待ちしておりますっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8657r/>

うまくいかない

2011年3月23日18時10分発行